

感謝と敬意を込めて

志渡岡 理恵

私が小柳康子先生と初めてお話ししたのは、2005年に開催されたイギリス・ロマン派学会全国大会でした。このとき私は、イギリスの女性作家ヘレン・マライア・ウィリアムズの『フランス書簡』について研究発表したのですが、小柳先生はその司会をしてくださいました。司会が小柳先生に決まったと学会から連絡を受けたときには、とても気持ちが高揚し、緊張するとともに、「あの小柳康子先生とお話しできる」と嬉しくて胸が高鳴ったのを今でも覚えています。というのも、小柳先生は早くから高名な研究者でいらっしゃるいましたが、特に2002年出版の『転換期の女たち——国家・ジェンダー・文学』の「メアリ・アステル論——『結婚の省察』における家庭と国家のポリティクス」を拝読し、メアリ・アステルという大変重要でありながら、難解で海外でもまだ研究の進んでいない作家を真っ向から論じているすごい方がいらっしゃる、小柳先生のお名前は私の心に強く刻まれていたからです。

実践女子大学には、英語圏の女性作家を研究するのに必要な資料がどの大学にも負けないくらい豊富に揃っています。これは小柳先生のご尽力の賜物です。小柳先生は授業でも、常に最新の研究動向をふまえた独自の視点から多様な女性の活動を取りあげてこられました。これからは私たちがこの伝統をしっかり守り、展開させ、受け継いでいかなければなりません。研究と教育への情熱を静かに燃やし続け、学問の新たな地平を果敢に切り拓いてこられた小柳先生に、心からの感謝と敬意を込めて「バトンを受け取りました」と申し上げたいと思います。

普段は穏やかで優しい小柳先生が、良識ある声が必要とされるときにはいつも凛と発言されていたのを思い出します。いろいろな女性作家について楽しくお話ししたことが一番の思い出です。寂しくなります。これからも、どうぞ私たちを温かく見守っててください。